

# ルカによる福音書9章51節～19章46節にみられる裏返し構造

## —対称性仮説に関する検証に向けて—

Contrast structure in Luke 9 : 51～19 : 46

—Consideration on Symmetry-hypothesis—

大喜多 紀明<sup>1</sup>

<sup>1</sup>滋賀民俗学会

Noriaki Ohgita<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Folklore Society of Shiga

キーワード：裏返し構造，対称性仮説，ルカによる福音書

Key words : Contrast structure, Symmetry-hypothesis, The gospel by Luke

### 抄録

前稿では、新約聖書に収納された「ルカによる福音書」にみとめられる裏返し構造を紹介した。本稿では、前稿を踏まえ、「ルカによる福音書」の約三分の一の範囲を占めるルカによる福音書9章51節～19章46節をテキストとし、裏返し構造の特徴を照合することにより得られた知見を資料として紹介する。

### 1. はじめに

物語の構造分析においては、例えば、ロシア神話の分析を31個の「機能」の観点から行ったウラジーミル・プロップの手法<sup>(1)</sup>や、二項対立の観点から神話分析を行ったクロード・レヴィ＝ストロースの手法<sup>(2)</sup>などがよく知られている。そのなかでも、ルーマニアのフォークロリストであるミハイ・ポップは、ルーマニアの昔話「兵士としての少女」の物語構造の分析を行ない、そこに裏返し構造と呼ばれる興味深い構造が見いだされることを紹介した<sup>(3)</sup>。

ポップの知見を受けた大林論文<sup>(4)</sup>は、日本のいくつかの異郷訪問譚に裏返し構造がみとめられることを示したうえで、大林の当該構造が異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」であるという説<sup>(5)</sup>を述べた。大林の推認について、依田論文<sup>(6)</sup>は、韓国の異郷訪問譚を題材に検証し、かかる蓋然性が高いことを示した。ただし、大林の推認は、異郷訪問譚であれば当該テキストに裏返し構造が出現すると述べているものの、裏返し構造が出現する理由を、当該テキストが異郷訪問譚であることに限定している訳ではない。

一方、大林論文は、異郷訪問譚以外にも裏返し

構造が出現するか否かを検証する必要性を述べた<sup>(7)</sup>。かつ、従前の大林論文および依田論文では、異郷訪問譚以外に裏返し構造が出現するか否かの検証は行われていない。

以上を踏まえ、筆者は、大喜多(2016)<sup>(8)</sup>、大喜多(2017)<sup>(9)</sup>、大喜多(2018)<sup>(10)</sup>において、異郷訪問譚以外に裏返し構造が出現する事例が存在するか否かを検証し、アイヌ口承テキストおよび聖書テキストにおける、異郷訪問譚ではないのだが裏返し構造がみとめられるいくつかの事例を示した。なお、かかる裏返し構造が出現する理由については、アイヌ口承テキストや聖書テキストには一般に交差対句<sup>(11)</sup>が頻用されることが知られており<sup>(12)(13)</sup>、こうした交差対句の使用を好む心性に一因する可能性を筆者は提示した<sup>(14)</sup>。なお、聖書テキストを題材に対称性仮説の蓋然性を検証した論文が、大喜多(2017)、大喜多(2018)である。

ここで、アイヌ口承テキストと聖書テキストは、先行研究<sup>(12)(13)</sup>に基づけば、双方とも、交差対句を好む心性がみとめられてきた。その一方、アイヌ口承テキストの著者はアイヌ民族(単一の民族)である。それに対し、聖書テキストの著者は、一般的にはイスラエル民族であると言えようが、例

えば、著者の立証が事実上不可能<sup>(15)</sup>とされる「創世記」や、イスラエル民族出身者を著者としない<sup>(16)</sup>「ルカによる福音書」、「使徒行伝」などがある。つまり、聖書に収納された各巻には、著者が明らかではないものがある。かつ、著者が単一の民族の出身者であるとも言えない<sup>(17)</sup>。

以上より、聖書テキストの場合、イスラエル民族の民族性あるいは当該民族に共通する心性がテキストの構造上の特徴に単純に反映されるものとは言えず、むしろ、聖書に収納された各巻を、当該著者の属性や当該巻の編集史的な知見などを踏まえ、個別に検証する必要があると言え、そのうえで、聖書全体の特性を検討する必要があると言える<sup>(18)</sup>。

かかる聖書の特性を前提に、筆者の前稿<sup>(19)</sup>では、聖書に収納された巻に対する個別の検証を行うことを目的に、「ルカによる福音書」をテキストとし、裏返し構造に基づく構造的知見を資料として提示した。

以下は、前稿で示した、「ルカによる福音書」にみとめられる裏返し構造の図式である<sup>(20)</sup>。

<p><b>A. 不自由と不信</b></p> <p>ヨハネの誕生を認めない ⇒ザカリヤロがきけなくなる 不信する</p> <p>↓</p> <p><b>B. 生命と配置</b></p> <p>イエスの誕生 飼葉おけ</p> <p>↓</p> <p><b>C. イエスの評価</b></p> <p>待望されるイエス</p> <p>↓</p> <p><b>D. 問答</b></p> <p>賞賛されるイエス 驚嘆すべき回答</p> <p>↓</p> <p><b>E. 対抗者</b></p> <p>悪魔の出現 試練を回避するイエス</p> <p>↓</p> <p><b>F. 宣教</b></p> <p>ガリラヤ地方 非受容→受容</p>	⇔	<p><b>M. 不自由と不信</b></p> <p>イエスをみえない ⇒イエスが認知させる 不信すべきではない</p> <p>↑</p> <p><b>L. 生命と配置</b></p> <p>イエスの死 石窟</p> <p>↑</p> <p><b>K. イエスの評価</b></p> <p>嘲笑されるイエス</p> <p>↑</p> <p><b>J. 問答</b></p> <p>侮辱されるイエス 寡黙</p> <p>↑</p> <p><b>I. 対抗者</b></p> <p>ユダの出現 試練を回避しないイエス</p> <p>↑</p> <p><b>H. 宣教</b></p> <p>エルサレム 受容→非受容</p>
--	---	---

↓

G. 移動

ガリラヤ地方⇒エルサレム

↑

上述の図式では、当該テキストが合計 6 対の対応を持つ裏返し構造により構成されていることを示された。

また、前稿では、当該図式を構成する、対応する要素 (A と M, B と L, C と K, D と J, E と I, F と H) のそれぞれの関係性について検証された。一方、要素 G については、テキスト全体のなかで占める範囲が相当に広いにもかかわらず、「テキスト全体の折り返しに位置している」<sup>(21)</sup>と述べたのみであり、詳細な検証は行われていない。そこで、本稿では、前稿の知見を踏まえつつ、要素 G に関する分析を行うこととする。なお、本稿の目的は、かかる要素 G に関する分析的知見を資料として提示するところにある<sup>(22)</sup>。

## 2. 裏返し構造の定義

本稿は前稿の知見を前提としている。前稿では、以下の A および B の双方の特徴を満たす構造を「裏返し構造」と呼んだ。

- A: 物語の「前半」部分に配置された要素に対して、物語の「後半」に相当する要素が、「前半」の「否定」・「対立」もしくは「対照」としての関連性を持って出現する<sup>(23)</sup>。
- B: 物語の「後半」に配置された要素は、「前半」の対応する要素の配列順序とは逆の順番で出現する<sup>(24)</sup>。

本稿における裏返し構造の定義も前稿と同様である。

## 3. テキスト

本稿では、「ルカによる福音書」における前稿の要素 G に相当する範囲をテキストとする。要素 G は、イエス一行がガリラヤ地方からエルサレムへと「移動」する様子をテーマとしている。当該範囲は、聖書の章・節立てにおける、ルカによる福音書 9 章 51 節～19 章 46 節に相当している。本稿ではこれを「テキスト G」と呼ぶ。

一般的に、ルカによる福音書 9 章 51 節～19 章 27 節の範囲は、「イエスのエルサレムへの旅」や

「ルカの旅行記」などと呼ばれる。さらに、かかるイエスのエルサレムへの旅（ルカの旅行記と同義）の大部分に相当するルカによる福音書9章51節～18章14節の範囲は「ルカの大挿入」と呼ばれ、著者であるルカが意図的に挿入した箇所であるとする説がある。このことについて、加藤論文<sup>(25)</sup>は次のように述べている。

この大省略と反対に、ルカはマルコになかった十の章にも及ぶ大きな部分を新たに自分の福音書の中に持ち込んでいる。それは九・五一～一八・一四の部分である。マルコではイエスは一〇・一でガリラヤから一挙に、サマリア<sup>(26)</sup>など、当然通るべき地域を飛ばしてユダヤに足を踏み入れる。あえてエルサレムへの旅と呼べる部分はマルコ一〇章のみである。それに対してルカは、マルコになかった様々な伝承資料を駆使して、福音書の三分の一以上をイエスがガリラヤからサマリアを通過してエルサレムに向かう旅の叙述にあてている。

私にはこの大省略と大挿入はルカの一つの構想から出るものと思われる。

いずれにせよ、ルカの大挿入あるいはイエスのエルサレムへの旅は、ルカによる福音書の三分の一程度以上の範囲を占めており、これは、当該福音書において占める割合としては決して小さいと言えないものである。また、テキストGの範囲は、大部分において、ルカの大挿入ないしイエスのエルサレムへの旅と重なっている。さらに、ルカの大挿入について、加藤論文は、イエス一行が「ガリラヤからサマリアを通過してエルサレムに向かう旅の叙述」であると述べた。なお、当該範囲には、主としてイエスと他者との対話の様子が収納されている。

また、加藤論文は、ルカの大挿入を著者ルカの構想により挿入された箇所とみなした。このことは、ルカの大挿入を大部分とする本稿のテキスト箇所は、ルカの属性が強く反映された箇所である可能性を示している。

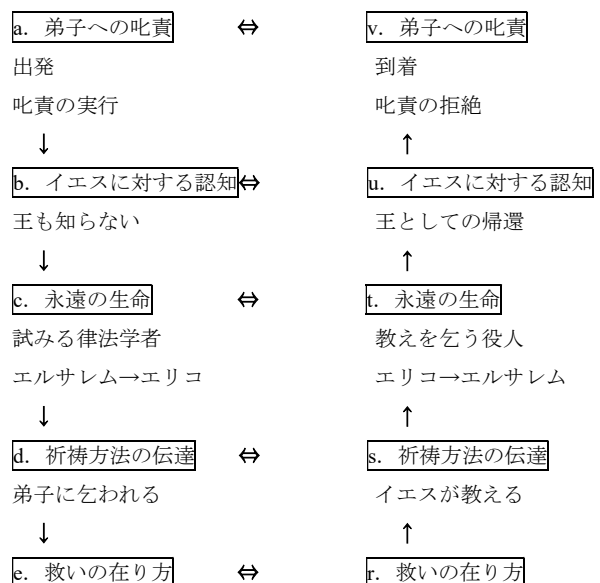
#### 4. テキストの構造

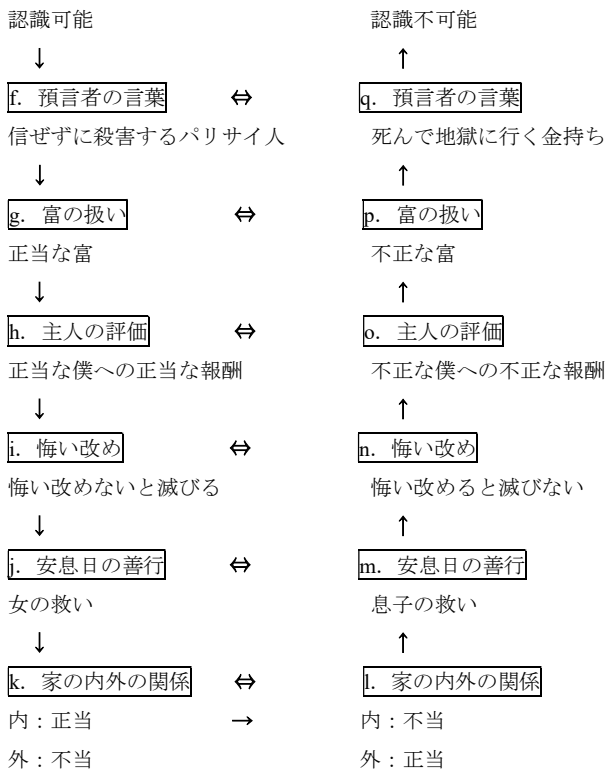
本節では、テキストGの範囲をa～vの合計22の断章に区分し、これに基づいた図式を提示する。なお、断章の範囲を示すにあたり、聖書<sup>(27)</sup>に付き

れた章・節立てを使用することにする。以下、筆者が定めた断章の範囲を示す。

断章	章・節立て
a	9章51節～9章62節
b	10章1節～10章24節
c	10章25節～10章42節
d	11章1節～11章13節
e	11章14節～11章36節
f	11章37節～11章54節
g	12章1節～12章34節
h	12章25節～12章59節
i	13章1節～13章9節
j	13章10節～13章21節
k	13章22節～13章30節
l	13章31節～13章35節
m	14章1節～14章35節
n	15章1節～15章32節
o	16章1節～16章8節
p	16章9節～16章13節
q	16章14節～16章31節
r	17章1節～17章37節
s	18章1節～18章8節
t	18章9節～19章10節
u	19章11節～19章38節
v	19章39節～19章46節

以上のa～vの断章に基づき作成した図式を次に示す。





上述の図式では、aとv、bとu、cとt、dとs、eとr、fとq、gとp、hとo、iとn、jとm、kとlがそれぞれ対応している。以下、それぞれの対応について説明する。

aとvについてである。aとvは、旅程の開始時と終結時における、イエスによる「弟子への叱責」をテーマとしている。aには、イエス一行が、ガリラヤからエルサレムへの移動を開始する場面が描かれている。その際、まず、サマリヤに先がけて使者たちが送られるのだが、人々はこれを歓迎しない。それを知った弟子であるヤコブおよびヨハネは、彼らを焼き払うようにイエスに主張する。それに対し、イエスは弟子たちを叱ることとなる。結果、一行はサマリヤへ訪問せず、他の村を経由していく。一方、vは、イエス一行がエルサレムに到着する場面である。ここでは、イエス一行を迎えた群衆のなかにいたパリサイ人たちがイエスに対して、弟子たちを叱ることを要請しているのだが、イエスはこれを拒絶する。つまり、aでは一行の旅程の出発が描かれているのに対し、vでは逆に、かかる旅程の終結が描かれている。また、aではイエスが弟子たちを叱責するのだが、vではイエスは弟子たちへの叱責を要請されるものの、それを拒絶する。このように、双方はイエスによ

る「弟子への叱責」をテーマとしているのだが、叱責の実行と拒絶という対照的な様子が描かれている。

bとuは、共に、「イエスに対する認知」をテーマとしている。bでは、イエスは72人を選定し、宣教へと送り出した後、弟子たちに対し、イエスは、あなたたちがイエスと会うことができたことが幸せなことであり、それは預言者や王たちが願っても叶わなかったことであると述べた。それに対し、uでは、オリブ山付近でイエス一行を迎えた群衆は、イエスを歓待し、あたかも王のように迎えられている。つまり、bでは、イエスが預言者や王からさえも認知されていない存在であるのだが、uでは、イエスは群衆から、王のような立場の存在として認知されており、双方は対照的である。

cとtは、「永遠の生命」に関する問答がテーマである。cでは、律法学者が、イエスを試みるために、「永遠の生命」を得る方法を尋ねた。それに対し、イエスは、エルサレムからエリコに下る際に強盗に襲われた人を救うサマリヤ人の譬えを述べ、これが隣人であり、かつ、当該律法学者が実践すべき規範であると主張した。一方、tでは、役人がイエスに、何をしたら「永遠の生命」が得られるかの教えを乞うている。それに対しイエスは、財産を貧しい人に分け与える必要性を説いた。役人はイエスのこの回答を聞き悲しむ。つまり、cとtは、共に、「永遠の生命」を得る方法をイエスが尋ねられているのだが、一方は試みるためであり、他方は真剣に教えを乞うており、双方は対照的である。

他にも、cでは、イエスのたとえ話にエルサレムからエリコに下る人物が描写されているのだが、これはあくまでも架空の人物である。それに対して、tでは、現実のイエスが、これからエルサレムに向かうためにエリコを訪問している。こうした点も対照的であると言える。

断章	人物	移動方向
c	架空の人物	エルサレム→エリコ
t	現実のイエス	エリコ→エルサレム

dとsは「祈祷方法の伝達」がテーマである。dにおいては、イエスは弟子から祈祷の方法を教えたいと言われる。それに対し、イエスは具体



的な実例を示すことにより、その方法を弟子に教えている。一方、sでは、イエスは、誰に乞われるまでもなく、人々に対して祈祷の方法を教えている。ただし、ここでは、具体的な実例を示さず、譬えで教えている。

断章	きっかけ	方法
d	弟子の要請あり	具体的実例
s	人々の要請なし	譬え

かかる、dとsでは、共に「祈祷方法の伝達」をテーマとしているものの、相手からの要請の有無や方法の具体的か否かという点については対照的である。

eとrは、「救いの在り方」をテーマとしている。ここで、eでは、人々はイエスの行う業を信ぜず、「天からのしるし」を求めている。かつ、イエスがソロモンやヨナにまさるものであり、人々に対し、イエスに注目することを促している。つまり、人々は人々なりの「救いの在り方」を求めているのだが、イエスはそれを否定し、その代わりとして現実のイエスを注目し受け入れることにより救いがなされることを主張した。それに対し、rでは、イエスは、罪を赦す立場における心得を弟子たちに述べている。かつ、パリサイ人による「神の国はいつ来るのか」という問いかけに、イエスは、「神の国は、見られるかたちで来るものではない」と告げ、さらに、弟子たちにも「人の子の日を一日でも見たいと願っても見ることができない」と告げた。また、弟子たちからさらに具体的に尋ねられた際、イエスは、「死体のある所には、はげたかが集まるものである」という比喩を述べるにとどまった。つまり、イエスは、「神の国」や「人の子の日」が通常では目視や認識が不可能であることを述べ、かつ、イエスは比喩を述べるにとどまったのである。

断章	救いの在り方	認識
e	現実のイエス	可能
r	目視できない神の国	不可能

以上のように、eとrは、共に救いの在り方をイエスが述べているのだが、一方は認識できるものであるのに対し、他方は具体的ではなく比喩によるものであり、かつ、通常では認識できないもので

あり、双方は対照的である。

続いてfとqは「預言者の言葉」をテーマとしている。fでは、イエスはパリサイ人の食卓にて、パリサイ人や律法学者が災いであること、今までの預言者が殺害されてきたことに対する責任が問われることを述べている。それに対し、qでは、欲深いパリサイ人たちがイエスをあざ笑った際、イエスが彼らに、譬え話のなかで、金持ちが死んで、火炎で苦しんでいる理由が、彼がモーセと預言者の言葉に耳を傾けないためであったことを述べている。なお、ここでの金持ちはパリサイ人を比喩したものである。

断章	死んだ人物
f	パリサイ人に殺された預言者
q	預言者を信じないで地獄で苦しむ

つまり、fではパリサイ人は預言者を殺害しているのだが、qでは、死んだ立場にあるのが、預言者の言葉に従わなかったパリサイ人であり、彼は地獄で苦しみを受けている。かかる双方は対照的である。

gとpのテーマは「富の扱い」である。gには、自分のために富を蓄えるのではなく、天に富を蓄えること<sup>(28)</sup>が必要であるという話書かれている。つまりこれは、正当な富とはいかなるものかという話である。それに対し、pには、不正な富を用いてでも友をつくるべきこと、不正な富に忠実であるべきことが書かれている。つまりこれは、不正な富をいかに扱うかという話である。このように、gとpには、共に「富の扱い」について書かれているものの、それぞれは正当な富と不正な富についてであり対照的である。

hとoは、「主人の評価」をテーマとしている。hには、主人は忠実な僕には財産を管理させるが、不忠実な僕は厳罰が与えられるという譬え話書かれている。逆に、oには、不正な手口で財産を増やした家令を主人が褒める話書かれている。ここでのhには、正当な僕に対して主人が正当な評価（報酬）を与えている。他方、oでは、詐欺行為ともいえる不正な行為により財産を増やした不正な僕に対して主人は不正な評価（報酬）を与えており、双方は対照的である。

iとnのテーマは「悔い改め」の履行と不履行である。iでは、イエスは譬えを駆使しつつ、悔い改

めなければ滅びることを告げている。対し、nでは、イエスは「100匹の羊」、「10枚の銀貨」、「放蕩息子」の譬えを駆使し、悔い改めれば滅びることがないことを告げている。このように、一方には悔い改めなかった場合、他方には悔い改めた場合が書かれており対照的である。

jとmのテーマは、「安息日の善行」である。jでは、安息日にイエスが18年間病気の霊につかれた女を安息日に治療する。対し、mでは、イエスは水腫を患っている男を安息日に治療する。双方はイエスが安息日に治療を行っているのだが、治療された人物が女性であることと男性であることが対照的である。

kとlのテーマは、「預言者への態度」である。kでは、イエスによる、主人の家に入れない僕の譬え話書かれている。ここでの主人の家は、預言者たちが住む「神の国」を表しており、僕は「神の国」から投げ出された人々を表していると言える。一方、lには、まず、パリサイ人たちがイエスを殺害しようとしていることをイエスが告げられ、それを機に、イエスは、今までエルサレムが預言者たちを殺害してきたこと、そのような状況下、イエスはイスラエルを幾度も集めようとしてきたこと、にもかかわらず、エルサレムはそれに応じようとしなかったことを述べ、「おまえたちの家は見捨てられてしまう」と宣言した。ここでの「家」はエルサレムを指していると言える。つまり、kでは、イエスにとって正当な立場にある預言者が「家」におり、追い出された人々はイエスにとって不当な立場であると言える。逆に、lでは、イエスにとって不当な立場にあるエルサレムが「家」におり、正当な立場であるイエスがそれを見捨てていると言え、双方は対照的である。

断章	家の内	家の外
k	預言者 [正当]	人々 [不当] (見捨てられる)
l	エルサレム [不当]	イエス [正当] (見捨てる)

## 5. 裏返し構造との照合

本節では、4節に示した構造を、2節に示した特徴Aおよび特徴Bと照合することにより、かかる構造が裏返し構造と言えるか否かに関して検討をする。

テキストGは、aとv、bとu、cとt、dとs、eとr、fとq、gとp、hとo、iとn、jとm、kとl

がそれぞれ対応しており、4節の図式に関する検討に基づけば、それぞれは対照的な関係である。この特徴は、特徴Aと合致している。他方、テキストGの前半の要素はa→b→c→d→e→f→g→h→i→j→kという順序で配列しており、後半の要素はl→m→n→o→p→q→r→s→t→u→vという順序で配列している。後半の要素の配列順は、対応する前半の要素の配列順とは正反対である。この特徴は、特徴Bと合致している。以上は、テキストGは特徴Aと特徴Bの双方に合致しているため、4節に示した構造は裏返し構造であることを示している。よって、テキストGは、合計11対の対応に基づく裏返し構造により構成されている。

## 6. まとめ

前稿では、ルカによる福音書が、AとM、BとL、CとK、DとJ、EとI、FとHという合計6対の対応と、折り返し位置に相当する要素Gからなる裏返し構造により構成されることが示された。

一方、要素Gは、確かに「移動」というテーマに基づき構成されているとは言えるものの、当該範囲が、ルカによる福音書全体の三分の一程度以上を占め、これは、当該福音書においては決して狭い範囲とは言えない。このことから、かかる範囲においても詳細な分析を施す必要であると考え、本稿では、要素Gに関する分析を、裏返し構造を照合する観点から行った。

本稿の分析によれば、要素Gは、aとv、bとu、cとt、dとs、eとr、fとq、gとp、hとo、iとn、jとm、kとlという、合計11対の対応に基づく裏返し構造により構成されていることが確認できた。

以上の知見に基づき、本稿で得たテキストGの構造を単純に前稿のルカによる福音書の裏返し構造に組み込めば、以下の構造が示されることとなる。

A. 不自由と不信	⇔	M. 不自由と不信
ヨハネの誕生を認めない		イエスをみえない
⇒ザカリヤロがきけなくなる		⇒イエスが認知させる
不信する		不信すべきではない
↓		↑
B. 生命と配置	⇔	L. 生命と配置
イエスの誕生		イエスの死
飼葉おけ		石窟
↓		↑

C. イエスの評価 ⇔ 待望されるイエス ↓ D. 問答 ⇔ 賞賛されるイエス 驚嘆すべき回答 ↓ E. 対抗者 ⇔ 悪魔の出現 試練を回避するイエス ↓ F. 宣教 ⇔ ガリラヤ地方 非受容→受容 ↓ a. 弟子への叱責 ⇔ 出発 叱責の実行 ↓ b. イエスに対する認知 ⇔ 王も知らない ↓ c. 永遠の生命 ⇔ 試みる律法学者 エルサレム→エリコ ↓ d. 祈禱方法の伝達 ⇔ 弟子に乞われる ↓ e. 救いの在り方 ⇔ 認識可能 ↓ f. 預言者の言葉 ⇔ 信ぜずに殺害するパリサイ人 ↓ g. 富の扱い ⇔ 正当な富 ↓ h. 主人の評価 ⇔ 正当な僕への正当な報酬 ↓ i. 悔い改め ⇔ 悔い改めないと滅びる ↓ j. 安息日の善行 ⇔	K. イエスの評価 ⇔ 嘲笑されるイエス ↑ J. 問答 ⇔ 侮辱されるイエス 寡黙 ↑ l. 対抗者 ⇔ ユダの出現 試練を回避しないイエス ↑ H. 宣教 ⇔ エルサレム 受容→非受容 ↑ v. 弟子への叱責 ⇔ 到着 叱責の拒絶 ↑ u. イエスに対する認知 ⇔ 王としての帰還 ↑ t. 永遠の生命 ⇔ 教えを乞う役人 エリコ→エルサレム ↑ s. 祈禱方法の伝達 ⇔ イエスが教える ↑ r. 救いの在り方 ⇔ 認識不可能 ↑ q. 預言者の言葉 ⇔ 死んで地獄に行く金持ち ↑ p. 富の扱い ⇔ 不正な富 ↑ o. 主人の評価 ⇔ 不正な僕への不正な報酬 ↑ n. 悔い改め ⇔ 悔い改めると滅びない ↑ m. 安息日の善行 ⇔
--	---

女の救い ↓ k. 家の内外の関係 ⇔ 内：正当 外：不当	⇔	息子の救い ↑ l. 家の内外の関係 ⇔ 内：不当 外：正当
--	---	---

つまり、ルカによる福音書は、合計 17 対の対応を持つ裏返し構造により構成されていると言える。ただし、これは単に、要素 G に本稿の構造を組み込んだことによるものであり、各要素の抽象水準を検討した結果に基づいている訳ではない。この点については今後検証するつもりである。

注

- (1)例えば、ウラジーミル・プロップ. 北岡誠司, 福田美智代 (訳). 昔話の形態学. 水声社, 1987.
- (2)例えば、クロード・レヴィ＝ストロース. 田島節夫 (訳). 神話の構造. みすず書房, 1972.
- (3)ポップが示した構造の初出は『Folclor Literar』(1967 年出版) に収納された論文「Metode noi in cercetarea structurii basmelor」である。しかし、筆者はこれを手に入できなかった。本稿では、当該箇所が掲載された Pop, Mihai. “Coordonate structurale ale folclorului literar”. Folclor literar românesc. 1990, p. 77-92. を参照した。
- (4)大林太良. 異郷訪問譚の構造. 口承文芸研究. 1979, (2), p.1-9.
- (5)本稿では、大林が示した仮説を「大林の推認」と呼ぶこととする。
- (6)依田千百子. 韓国の異郷訪問譚の構造. 口承文芸研究. 1982, (5), p.47-57.
- (7)大林論文の 9 ページを参照した。
- (8)大喜多紀明. アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造：異郷訪問譚によらない事例. 北海道言語文化研究. 2016, (14), p.45-72.
- (9)大喜多紀明. 聖書「創世記」冒頭の 5 つの物語の構造：異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例. 北海道言語文化研究. 2017, (15), p. 195-216.
- (10)大喜多紀明. 新約聖書「マタイによる福音書」の冒頭に配置された 5 つの物語の構造：「対称性仮説」の蓋然性. 北海道言語文化研究. 2018, (16), p. 25-48.
- (11)「交差対句」は、「キアスムス」や「交錯配列」などとも呼ばれるのであるが、本稿では「交差対句」という呼称を使用する。交差対句とは、

- 例えば、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A'$ のように、要素の対が同心円状に配列する、対称性に富んだ構造のことである。
- (12) 例えば、大喜多紀明. アイヌの子守歌(イヨンルイカ)についての考察: 心性が継承される直接的なプロセス. 京都民俗. 2013, (30/31), p. 143-158.
- (13) 例えば、村井源. マルコ福音書の多層集中構造. 日本カトリック神学会誌. 2009, (20), p. 65-95.
- (14) 本稿では、「裏返し構造の出現に対し、交差対句を好む心性が一因する」という仮説を「対称性仮説」と呼ぶ。
- (15) いのちのことば社. 聖書 新改訳 注釈・索引・チェーン式引照付. いのちのことば社, 1981. (本稿ではこれを「いのちのことば社(1981)」と呼ぶ)の「旧約聖書」編、「創世記・緒論」項には次のように書かれている。「原初の歴史的資料を通して、神がご自身の御旨を啓示されるに当たり、モーセを編集者として用いられた、と考えることはふさわしいことと思われる。しかし、現在、それを歴史的に立証することは不可能であろう。」
- (16) いのちのことば社(1981)の「新約聖書」編、96ページには「ルカによる福音書」の著者ルカについて以下のように書かれている。「新約聖書の各書の著者のほとんどすべてがユダヤ人であるのに対し、彼は異邦人であった。」なお、ここでのユダヤ人とは、事実上、イスラエル民族に内包される概念である。
- (17) いのちのことば社(1981)によれば、著者の信憑性を検証すべき巻、あるいは、著者が不明な巻は、「創世記」以外にもある。
- (18) 本稿ではこれを「聖書の特徴」と呼ぶ。
- (19) 大喜多紀明. 「ルカによる福音書」全体における裏返し構造. 人間生活文化研究. 2018, (28), p. 75-81. なお、本稿ではこれを「前稿」と呼ぶ。
- (20) 「ルカによる福音書」における裏返し構造の図式は前稿の77, 78ページに掲載されている。
- (21) 前稿79ページ。
- (22) 本稿の目的は、テキストの分析的知見を資料として提供するところにあるので、テキストの構造と著者の属性との関連に関する考察や、編集史を踏まえた検証については、本稿では行わないこととする。なお、前稿もそうであるのだが、本稿における分析の手法には恣意が介入する余地があり、この点が本稿の方法論上の課題であることをここに述べておきたい。
- (23) 本稿ではこれを「特徴A」と呼ぶ。
- (24) 本稿ではこれを「特徴B」と呼ぶ。
- (25) 加藤善治. 民族の枠を越える福音: 試論・共観福音書に見るイスラエルから全民族への歩み. 神學研究. 1993, (40), p. 53-78.
- (26) 「サマリヤ」の表記には「サマリヤ」と「サマリア」がある。加藤論文では「サマリア」を採用している。本稿では、後述の(27)に示すように、日本聖書協会. 聖書. 日本聖書協会, 1989. に収納された箇所をテキストとして使用したため、日本聖書協会(1989)における表記法である「サマリヤ」を採用した。
- (27) 本稿では、日本聖書協会(1989)に掲載された箇所をテキストとして採用した。
- (28) 本稿ではこれを「正当な富」と呼ぶことにする。

(受付日: 2018年9月29日, 受理日: 2018年11月9日)



**大喜多 紀明（おおぎた のりあき）**

現職：一般社団法人地域コミュニティ談話会代表理事。

学籍：自由が丘産能短期大学能率科福祉と心理コース2年次。

東京工業大学大学院総合理工学研究科電子化学専攻修士課程修了（理学修士）。

専門は民俗学，文化人類学。

主な論文：アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察：交差対句と心意。アジア民族文化研究。2012, (11), p.181-213.

聖書「創世記」冒頭の5つの物語の構造：異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例。北海道言語文化研究。2017, (15), p.195-216.